単元を通して歴史的事象のつながりを考察する力の育成

―― 生徒が見いだした疑問を基に「問い」を設定し、単位時間ごとに解決する過程を通して ――

長期研修員　　春日　大

《研究の概要》

中学校の歴史的分野の学習において、生徒が学習課題を設定し、その解決を図る課題解決型の学習過程の研究である。単元の学習課題と、単位時間ごとの学習課題につながりをもたせることで、歴史的事象を関連付けて考察できることをねらう。本研究では、学習課題を「問い」と表現する。

「問い」は、教師が資料を効果的に活用し、そこから生じた疑問や驚きを基に生徒が設定する。単元の目標（ねらい）に導く「問い」をＭＱ（メイン・クエスチョン）とし、単位時間の「問い」をＳＱ（サブ・クエスチョン）と表す。単位時間で学習したことが、ＭＱの解決の要素となるようにＳＱを設定する。ＭＱとＳＱを組み合わせて構造化することで、歴史的事象のつながりや因果関係を考察する力の育成を目指したものである。

キーワード　【社会－中　課題解決　ＭＱ　ＳＱ　資料活用　問いの構造化】

群馬県総合教育センター

分類記号：Ｇ０２－０３　平成３０年度　２６７集

Ⅰ　主題設定の理由

中学校学習指導要領（平成29年３月公示）では、歴史的分野の目標として、「社会的事象の歴史的な見方・考え方を働かせ，課題を追究したり解決したりする活動を通して，広い視野に立ち，グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の形成者に必要な公民としての資質・能力の基礎を次のとおり育成することを目指す」とある。また、中学校学習指導要領解説社会編（平成29年７月）では(1) 改定の趣旨として、「課題を追究したり解決したりする活動を充実し、知識や思考力等を基盤として、国家及び社会の形成者として必要な資質・能力を育んでいくことが求められる」と記されている。以上のことより、課題解決の活動を重視することが求められている。また、本県の平成30年度学校教育の指針解説には平成29年度全国学力･学習状況調査の結果について「目標の内容や提示の仕方が形骸化してしまい、生徒に対して有用性の意識化が図れていない」とある。有用性の意識化とは、単元を通して課題意識が継続することと捉える。そのため、単元の課題と単位時間の課題とにつながりをもたせることで、単元を通して生徒の課題解決の意識の継続を図る。

本研究では、学習課題を「問い」と表現する。そして、単元の目標(ねらい)の達成に導くための「問い」をメイン・クエスチョン（以下、ＭＱと表記）単位時間ごとの「問い」をサブ・クエスチョン（以下、ＳＱと表記）と表現する。ＭＱは単元全体のつながりを捉えられるようなものを設定し、具体的には「なぜ、～なのか」のような思考を促す疑問詞を使う。ＳＱは、「どのように～なのか」「誰が～なのか」のようなより具体的な事実の認識を促す疑問詞を使う。単元の目標(ねらい)に到達できるように、問いの型「５Ｗ１Ｈ」を適宜組み合わせてＭＱとＳＱを設定し、問いを構造化する。

問い(ＭＱ・ＳＱ)は、教師が資料を効果的に活用し、そこから生じた疑問や驚きを基に生徒が設定する。本研究では、以上のような問い(ＭＱ・ＳＱ)の設定と構造化を図ることで、単元を通じて生徒の課題解決意識が継続し、その解決の過程を通して歴史的事象のつながりを考察する力の育成を目指す。

Ⅱ　研究のねらい

歴史的分野の学習において、歴史的事象のつながりを考察する力を育成するために、単元の目標(ねらい)の達成に導くことができる問いＭＱと単位時間ごとに事実の認識を促す問いＳＱを設定する。ＭＱを基に単位時間のＳＱを組み合わせることで問いを構造化し、その解決を図る学習過程の有効性を明らかにする。

Ⅲ　研究仮説（研究の見通し）

１　つかむ場面において

資料から疑問や驚きを生じさせ、生徒が主体的にＭＱを設定できれば、単元を通して解決の意識の継続が図れるであろう。

２　追究の場面において

ＭＱの解決につながるＳＱを設定し、課題解決的な学習過程を経ることができれば、単位時間ごとに歴史的事象のつながりを意識したまとめができるであろう。

３　まとめの場面において

ＳＱの解相互のつながりや、ＭＱとのつながりをまとめることで、単元全体の歴史的事象のつながりを考察する力を育成することができるであろう。

Ⅳ　研究の内容

1　基本的な考え方

(1)　問いとは

主題を考察するための学習上の課題を生徒に示したもので、「なぜ、～なのか」「どのように～していくのか」など、～の部分が焦点化された疑問文の形で表現したもの。本研究においては、生徒の疑問や驚きを集約し、クラス全体で（ＭＱ・ＳＱを）設定し、その解決を図る学習過程を経る。

(2)　問いの設定とは

生徒が教師とのやり取りを通して主体的に設定する。教師が資料に対して視点を示して焦点化したり、複数の資料を比較したりして、類似点や差異点に気付かせて生徒から生じた疑問や驚きを基にしていく。

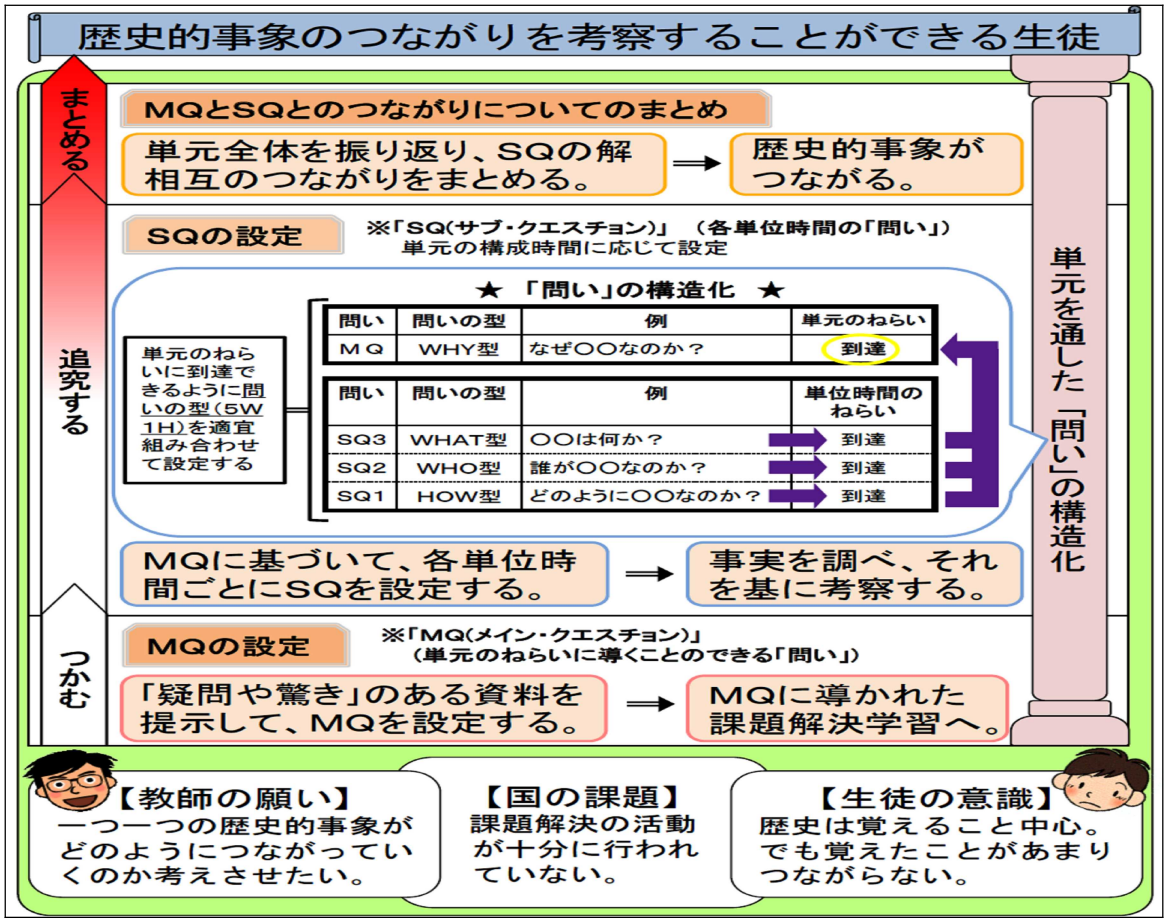
(3)　問いの構造化

つかむ過程において、ＭＱについては、歴史的事象の意味を捉えられるよう「なぜ」などの疑問詞で問うことで、思考の出発点とする。追究の過程において、ＳＱは歴史的事象の考察ができるように、事実の認識を問うような「どのように、どのような」、多面的・多角的な視点に立てるように、「誰が」のように、５Ｗ１Ｈを適宜組み合わせて設定し、問いの構造化をはかる。

(4)　問いの構造化シートについて

教師が単元の目標や、学習内容を把握した上で、構造化した問いを視覚的に整理したものである。『中学校学習指導要領解説　社会編』に示されている問い（学習課題）の例（別紙資料15ページ参照）や、単元の課題として設定したい具体的な内容、単元の問いと単位時間のつながり、主な提示資料、発問のねらいを項目として作成する。

2　研究構想図



Ⅴ　研究の計画と方法

１　第１回目授業実践

(1)　授業実践の概要

対　　象	研究協力校　第２学年　１学級35名
実 践 期 間	平成30年７月13日～平成30年７月19日　４時間
単　元　名	「欧米の進出と日本の開国」
単元の目標	欧米諸国のアジア進出を近代革命、産業革命、アジア諸国の動きなどを通して理解する。

(2)　検証計画

検証項目	検証の観点	検証の方法
見通し1	資料に疑問や驚きを生じさせ、生徒が主体的にＭＱを設定することは、単元を通して解決の意識の継続を図ることに有効であろう。	○学習活動の観察 ○ワークシートの記述
見通し2	ＭＱの解決につながるＳＱを設定し、課題解決的な学習過程を経ることは、単位時間ごとに歴史的事象のつながりを意識したまとめをすることに有効であろう。	
見通し3	ＳＱの解相互のつながりや、ＭＱとのつながりをまとめることは、単元全体の歴史的事象のつながりを考察する力を育成することに有効であろう。	

(3)　抽出生徒（第２回目の授業実践も同生徒）

Ａ	歴史的分野の学習において、一問一答で答えられるような基礎的な知識は身に付ているが、事象のつながりを文章に表現することは苦手である。課題解決型の学習を通して、事象の原因と結果を意識させ、因果関係を考察できるように支援していきたい。
Ｂ	歴史的分野の学習において、小学校及び中学校の既習内容について知識は身に付いている。得た知識を基に考えを広めたり、深めたりしたことを文章に表すのは苦手である。ＭＱとＳＱを意識して単位時間のまとめをすることで支援していきたい。

(4)　評価規準

社会的事象への関心・意欲・態度	社会的な思考・判断・表現	観察・資料活用の技能	社会的事象についての知識・理解
欧米諸国の市民革命や産業革命に関心をもち、近代国家の成立やその後のアジア諸国への大きな影響について、意欲的に追究している。	欧米諸国のアジア進出について、その理由や背景を市民革命や産業革命などの事象を多面的・多角的に考察し、事象同士を関連付けて表現している。	欧米諸国とアジア諸国の動きについて、資料を収集して読み取ったり、年表にまとめたりしている。	欧米諸国が近代社会を成立させてアジアへ進出していった経過を理解し、その知識を身に付けている。

(5) 指導計画

過程	時	学習活動	研究の手立て
つかむ	1	○MQの設定　(WHY型) ・『アヘン戦争』の絵から気付いた事を挙げる。 ・気付いたことを整理する。 ・疑問を基にMQを設定する。 **MQ「なぜ、欧米人がアジアにやってきたのか。その結果どのような変化があったのか。」** ○SQ1の設定　(HOW型) ・MQの「欧米」を基にSQを設定する。 **SQ「 人の平等・権利を尊重する考えはどのように決められたのか。」** ・『権利の章典』『独立宣言』『人権宣言』を比較し、似ている言葉や考えを探す。 ・欧米諸国が、市民革命を通して近代国家を形成していった過程を理解する。 ・欧米諸国の近代社会の成立の様子に関心をもち、資料を活用して調べる。 ○調べたことを基に考察する。	○『アヘン戦争』の絵 視点・服装→アジア風 ・場所→湾内 比較・木製の船と鉄製の蒸気船(煙) ・攻撃する船とされている船がある。 ○MQの「欧米」を基にSQを設定させる。 ○『権利の章典』『独立宣言』『人権宣言』の資料の比較を通して、欧米の市民革命の様子を想像させる。 ○欧米の市民革命の様子と影響を与えた思想家について調べさせる。
追究する	2	○SQ2の設定　(HOW型) ・『鉄道の開通』の絵から気付いたことを挙げる。 **SQ「蒸気機関の発達によって社会はどのように変化したのか。」** ・産業革命を経て、産業や社会の仕組みが大きく変化したことを調べる。 ・蒸気機関の発達よってどの様に社会が変化したか、技術、動力、交通、その他の面から調べる。 ○調べたことを基に考察する。	○『鉄道の開通』の絵 比較・機関車と馬 →早さの差・動力の差 ○産業革命の変化を予想させる。
		○SQ3の設定（HOW型） ・『ロシアとアメリカの拡大』の図から気付いたことを挙げる。 **SQ「ロシアやアメリカはどのように発展していったか。」** ・ロシアとアメリカ合衆国の領土の広がり方を比較し、共通点を探す。 ・ロシアとアメリカの発展について、領土の広がり、政治の様子、国内の様子について比較する。 ○調べたことを基に考察する。	○『ロシアとアメリカの拡大』の図から、領土の広がる様子を捉えさせる。 ○領土の広がり方の共通点を捉えさせその理由予想させる。 ○領土を広げた理由を調べさせる。
		○SQ4の設定（HOW型） ・イギリス対清、イギリス対インドの『片貿易』の図から気付くことを挙げる。 **SQ「イギリスはどのように利益を上げたのか。」** ・18世紀～19世紀頃の清とインドの様子を比較する。 ・イギリスが利益を上げた様子を調べる。 ○調べたことを基に考察する。	○『片貿易』と『三角貿易』のイメージ図を比較させ、イギリスのアジア侵略の背景を　予想させた後に調べさせる。
まとめ	1	○MQまとめ ・欧米がアジアに進出してきたことを背景とともにまとめる。	○SQのまとめを生かしてMQをまとめさせる。

(6)　問いの構造化シート

新学習指導要領解説　社会編より	ねらい	欧米諸国が近代社会を成立させてアジアへ進出したことを理解できるようにする
	課題(問い)の考察	工業化の進展と政治や社会の変化」などに着目して問い(学習課題）を設定し，欧米諸国の市場や原料供給地を求めたアジアへの進出が，日本の政治や社会に与えた影響などを考察できるようにすることなどが考えられる。

ＭＱ	なぜ、欧米人がアジアにやってきたのか。	発問の型	ＷＨＹ型（なぜ）
資料	『アヘン戦争』の絵　（広州湾での戦闘）		
ねらい	単元の後半に関わるアヘン戦争の絵より、中国（アジア）にイギリス（欧米）が武力で勢力を広めにきていることをつかませ、その背景を学ぶことをねらう。		

題材	①近代革命の時代	②産業革命と19世紀のヨーロッパ	③ロシアとアメリカの発展	④ヨーロッパのアジア侵略
ＳＱ	人の平等・権利を尊重する考えはどのように決められたのか。	蒸気機関の発達によって、社会はどのように変化したのか。	ロシアやアメリカはどのように発展していったのか。	イギリスはどのように利益をあげたのか。
ＭＱとのつながり	近代革命により、欧米諸国の民衆が力を持つようになったこと、同様に資本主義の広がりをもとに市場としてアジアに勢力を伸ばそうとしていることを捉えさせたい。	産業革命による技術革新により、大量生産できるようになった工業製品の市場として欧米の国々がアジアに進出してきたことを捉えさせたい。	ロシアやアメリカが勢力を広め貿易をするために海外に出ていくということとアジアへの進出を捉えさせたい。	イギリスが中国との貿易の不均衡(銀の流出)を挽回し、利益を上げるために武力で勢力を広めようとしていることを捉えさせる。今後、日本へ欧米が勢力を広めることもつながらせたい。
提示資料	『権利の章典』『フランス人権宣言』『アメリカ独立宣言』	『鉄道の開通』の絵	『ロシアとアメリカの拡大』の図	『片貿易』『三角貿易』のイメージ図
発問の型	HOW型 どのように	HOW型 どのように	HOW型 どのように	HOW型 どのように
発問のねらうところ	欧米として、代表的なイギリス、フランス、アメリカの史料を比較して共通する考え方をつかませたい。	鉄道の開通によって沸く絵から、新しい技術（蒸気機関）の登場をつかませたい。	『ロシアとアメリカの拡大』の図より、ロシアは内陸から沿岸部に向かい、北アメリカは東から西に向かい領土を広めている様子をつかませたい。	『片貿易』『三角貿易』のイメージ図からイギリス対インド・イギリス対中国の貿易の様子を捉えさせたい。
身に付けさせたいこと	『権利の章典』『独立宣言』『人権宣言』の資料の比較を通して、欧米の市民革命の様子を想像させたい。	蒸気機関をもとに、社会が変わる様子を予想させ、調べる学習を通して産業革命による社会の変化をつかませたい。	領土が海岸へと広がる様子に気付かせ貿易とのつながりをつかませることで理解を深めさせたい。	アヘン戦争に敗北した清とイギリスとの間に結ばれた不平等な条約の内容を読み取らせたい。 ＳＱのまとめを生かしてＭＱをまとめさせたい。

２　第２回目授業実践

(1)　授業実践の概要

対　　象	研究協力校　第２学年　１学級　35名
実 践 期 間	平成30年10月23日～平成30年11月２日　４時間
単　元　名	欧米の進出と日本の開国」
単元の目標	・開国から江戸幕府滅亡までの過程を、欧米諸国の動きと関連させて理解する。 ・開国の影響とその後の幕府政治の推移について多面的・多角的に考える。

(2)　検証計画（第１回目の授業実践と同様）

(3)　抽出生徒（第１回目の授業実践と同生徒）

(4)　評価規準

社会的事象への 関心・意欲・態度	社会的な 思考・判断・表現	観察・資料活用の技能	社会的事象についての 知識・理解
開国の影響から江戸幕府滅亡までの過程について関心を高め、意欲的に追究している。	開国の影響とその後の幕府政治の推移について、政治面・経済面・社会面から考察して公正に判断し、適切に表現している。	開国の影響とその後の幕府政治の推移について、追究し考察した過程や結果をまとめている。	開国から江戸幕府滅亡までの経緯を理解し、その知識を身につけている。

(5)　指導計画

過程	時	学習活動	研究の手立て
つかむ	1	○MQの設定　(WHY型) ・『下関砲台占領』の写真から気付くことを挙げる。 **MQ「なぜ日本なのに、欧米人に占領されているのか。」** ○SQ１の設定　(WHY型) ・『黒船来航』の絵から気付くことをあげる。 **SQ「なぜ、たくさんの黒船が日本にやってきたのか。どのようなことが起きるのか。」** ○条約の内容を調べる。 ○調べたことを基に考察する。。	○『下関砲台占領』の写真から単元の課題を設定させる。 視点・住居 →日本家屋 ・人→欧米人 ○『黒船来航』の絵 視点・船の比較→大小 ○『日米和親条約』と『日米修好通商条約』の資料から不平等さを捉えさせる。 ○条約の内容を理解する。
追究する	2	○SQ２の設定　(WHO型　HOW型) ・横浜の『開港前』『開港後』の絵図を比べ、違いを挙げる。 **SQ「開港したことで､誰が､どのような影響を受けたのか。」** ・社会、経済の面から開港の影響を調べる。 ・調べたことを基に、幕府・一般・尊皇攘夷派の立場に立って考える。 ・国内が不安定になってきた状況を捉える。 ○調べたことをまとめる	○横浜の開港前後の絵図を比較させる。 ○対外政策を転換して開国したことや、国内の影響について､資料から捉えさせる。 ○倒幕への動きや幕府の対応、外国の動きなどを調べさせ、江戸幕府の滅亡までの経緯をまとめさせる。
		○SQ３の設定(WHY型・HOW型) ・『大政奉還』の絵から気付くことを挙げる。 **SQ「なぜ、このような様子になっているのか。どのようなことが起きているのか。」** ○大政奉還前後の薩摩藩、長州藩、幕府、朝廷の変化をまとめる。	○大政奉還の絵の様子から幕府のただならぬ様子を捉えさせる。 ○武士が将軍に伏している様子や、将軍と武士の距離感などに注目させる 。 ○大政奉還前後の薩摩藩、長州藩、幕府、朝廷の変化とその背景とともに捉えさせる。
まとめ	1	○MQのまとめ ・出来事を年表にまとめる。 ・長州藩・薩摩藩・幕府の動きを背景と共にまとめる。	○SQのまとめを生かしてMQをまとめさせる。

(6)　問いの構造化シート

新学習指導要領解説　社会編より	ねらい	開国とその影響について、欧米諸国のアジア進出と関連付けて、幕府が対外政策を転換して開国したことと、その政治的及び社会的な影響を踏まえ、それが明治維新の動きを生み出したことに気付くことができるようにする。
	課題(問い)の考察	工業化の進展と政治や社会の変化」などに着目し て課題（問い）を設定し、欧米諸国の市場や原料供給地を求めたアジアへの進出が、日本の政治や社会に与えた影響などを考察できるようにすることなどが考えられる。

ＭＱ	なぜ日本なのに、欧米人に占領されているのか。		発問の型	ＷＨＹ型（なぜ）
資料	『下関砲台占領』の写真			
ねらい	日本国内が欧米人に占領されていることをつかませ、その背景にどのようなことがあったのか、欧米と薩摩藩、長州藩、幕府、朝廷の立場にたって捉えさせていきたい。			
題材	①開国と不平等条約	②尊王攘夷運動と開国の影響	③江戸幕府の滅亡	単元の振り返り及びまとめ
ＳＱ	なぜたくさんの黒船が日本にやってきたのか。どのようなことが起きるのか。	開港したことで、誰が、どのような影響を受けたのか。	なぜ、このような様子になっているのか。どのようなことが起きているのか。	MQのまとめと振り返り
ＭＱとのつながり	開国したことにより、欧米と日本と関りを持つことになるが対等な関係ではないことを捉えさせたい。	開国によって、幕府以外の武士や、公家などから尊王攘夷論が高まったこと、物価上昇により、一般民衆の生活にも負担が多くなったことを捉えさせたい。	実際に砲火を交えたことで、薩長各藩が攘夷を諦め、欧米と関係を改め倒幕に向けて動き出したことを捉えさせたい。	開国の影響で、国内が不安定になり、幕府が滅亡し新政府へと政権が移って行く様子を捉えさせたい。
提示資料	『黒船来港』の絵	『横浜の開港前』の図 『開港後』の絵	『大政奉還』の絵	『下関砲台占領』の写真
発問の型	ＷＨＹ型　ＨＯＷ型 なぜ・どのように	ＷＨＯ型　ＨＯＷ型 誰が・どのような	ＷＨＹ型　ＨＯＷ型 なぜ・どのように	
発問のねらうところ	日米和親条約と日米修好通商条約を比較し数年間の欧米との関係の変化を捉えさせたい。	幕府の対外政策に対して、様々な立場の人々が不満をもっていたことを捉えさせたい。	将軍慶喜が「政権返上」しようとした理由と、その背景について捉えさせたい。	
身に付けさせたいこと	『下関砲台占領』の写真から、日本の危機感を捉えさせるとともに、日米修好通商条約の内容から、日米間が対等な関りではなかったことをつかませたい。	グラフより、開国によって物価が急上昇している様子をつかませ、武士たちだけでなく、一般民衆にまで、開国による影響があったことを理解させたい。	薩英戦争、下関砲台の占領など、実際に欧米と関りをもった藩が攘夷から倒幕へと変化する動きと、それを受けて幕府が政権を返上する流れを捉えさせたい。	ＳＱのまとめを生かして、ＭＱをまとめさせたい。

Ⅵ　実践の結果と考察

1　第１回目の授業実践の結果と考察

(1)　検証の視点１

資料に疑問や驚きを生じさせ、生徒が主体的にＭＱを設定することは、単元を通して解決の意識の継続を図ることに有効であったか。

① 結果

ＭＱ「欧米人がなぜアジアにやってきたのか」を設定させるために、単元の後半に登場する『アヘン戦争』の絵（広州湾の戦闘）を示した。「欧米」と「アジア」を単元を通して意識させるため、「蒸気船（煙を出している）」と「服装」に視点を絞った。次に、疑問を挙げさせると「なぜ、攻められているのか」「砲撃しているのはどこの船なのか」との意見が出た。蒸気船や砲撃などから「欧米」、服装からは「アジア」との意見が出て、整理すると**「欧米人がなぜアジアにやってきたのか」**というＭＱへとつなげることができた。絵から気付くことを自由に挙げさせたことにより、全ての生徒が何らかの気付きを得ることができ、生徒の疑問や驚きを基にＭＱを設定することができた。

② 考察

資料の見るべき視点を絞ると、短い時間で教師が意図した問いに結び付きやすい。提示後に教師が生徒とのやりとりを通じて焦点化したり、既習事項につなげたりすることで、疑問や驚きを生じさせることができた。今後の実践も取り入れていきたい。

(2) 検証の視点２

ＭＱの解決につながるＳＱを設定し、課題解決的な学習過程を経ることは、単位時間ごとに歴史的事象のつながりを意識したまとめをすることに有効であったか。

① 結果

ＭＱとＳＱのつながりを意識させるためＭＱを黒板、ワークシートに毎時間提示した。資料読み取りの場面において第２時の『鉄道の開通』の絵から気付いたこと(英国旗など)を記入できた生徒が約８割いた。ＭＱの欧米を意識した記述となった。また、本時の振り返りの文章中にＭＱと関りをもたせている記述があった。

② 考察

単位時間ごとに得た知識を基に生徒がその都度考えを深めようとする態度が見られ、歴史的事象をつなげ、因果関係を考察するために有効であったと考える。単元前半では誤りとなってしまうこともあったが、単元全体を振り返った時にその誤りに気付くことができていた。このようなことは学習内容が広まったり、深まったりした様子であると考えられる。

毎時間ＳＱとＭＱ両方についてまとめるのは時間的に難しく、また、ＭＱのまとめの内容が重複することこともあった。今後の実践では、ＭＱを意識してＳＱをまとめる程度とし、ＭＱについてまとめるのは単元の最後に全体を振り返って行うこととする。

(3) 検証の視点３

ＳＱの解相互のつながりや、ＭＱとのつながりをまとめることは、単元全体の歴史的事象のつながりを考察する力を育成することに有効であったか。

① 結果

「アヘン戦争」の起きた中国はアジアであり、アジアの一国である日本にも今後、欧米との関わりが増えてくるという見通しへとつなげている生徒もいた。小学校で学んだ既習の知識と資料を関わらせて考えることができていた。図１のような記述が見られた。

A	○関税という言葉が出ててきました。イギリスが清（中国）に対して不平等な条約を結ばせました。
B	○権力をふるいイギリスが清（中国）を従わせた。植民地にして、不平等な条約を結ばせ、イギリスが得をした。
他生徒	○欧米人は産業や工業の発により、通称を求め利益を得るためにアジアにやってきた。 ○植民地をつくり、有利な貿易をして利益をあげるために欧米人がやってきた。産業革命により、欧米は製鉄技術などが発達した。武力で劣るアジアの中には植民地となる国もあった。

図１　ＭＱに対する生徒の記述【一部抜粋】

② 考察

ＭＱと関わるようにＳＱを設定し、解決を図る学習過程を経ることにおいて効果があることがわかった。ＭＱは単元のねらいを導くための問いであり、一問一答的な答えを求めるものではない。ＳＱのまとめはできていても､ＭＱのまとめで一問一答的な記述となってしまった生徒もいたので、今後の実践では、歴史的事象のつながりが意識できるような支援を取り入れていきたい。

条約の内容の読み取りなど、知識的な理解はよく出来ている様子がうかがえた。歴史的事象の背景について、事実を基に考察できるよう今後の支援の課題が見られた。

蒸気機関の発展を工業製品と、武力に結びつけて理解していた。このことは、『アヘン戦争』（広州湾の戦闘）の絵において「船」→工業化、「爆発」→戦力の印象が強かったことがうかがえる。また、工業製品の輸出先ととらえることもできていた。「蒸気機関」を基につながりを意識して理解を深めることができた。

２ 第２回目の授業実践の結果と考察

(1) 検証の視点１

資料に疑問や驚きを生じさせ、生徒が主体的にＭＱを設定することは、単元を通して解決の意識の継続を図ることに有効であったか。

① 結果

ＭＱの設定のために、『下関砲台の占領』の写真を示し気付いたこととして日本家屋、欧米人、砲台などが生徒から挙げられた。それを基に、日本家屋から場所が日本であること、欧米人が砲台を占拠していることを全体で共有し、資料の疑問を考える場面を設定した。「なぜ、日本なのに、外国人がいるのか」「なぜ、欧米人に負けているのか」などが出された。この疑問を生かして、**「なぜ、日本なのに欧米人に占領されているのか」**がＭＱとして設定された。実践①と同様に、すべての生徒が資料から気付くことは出来ていた。疑問を設定するために、ワークシートに「○○だから、△△ではないか。」という型を示した。

A	○この後、どうなってしまうのか。
B	○武器を持った外国人がたくさんいるから支配されたのではないか。
他生徒	○外国人が大人数で、日本にいるから戦争なのではないか。 ○武器を持った外国人がたくさんのいるから、日本が攻め込まれたのではないか。

図２ 資料から予想したことについての生徒の記述【一部抜粋**】**

② 考察

比較することを基に疑問を設定した。比較する時は、片方、または、両方のことを知っていなければならない。比較するためには既習内容を整理することが必要となる。本単元では、生徒の気付きから、「日本家屋」と「欧米人」との比較となった。生徒はまず、日本家屋から場所は日本であると捉えた。そこから「日本に外国人はあまり住んでいない」・「日本は対外で戦ってはいない」という既習事項と、外国人から欧米と捉え、そこから「産業革命」・「進んだ技術」・「インドや中国で勢力を広げた」という既習事項を考察して、疑問を生じさせたと捉える。

このことから、ＭＱを設定するにあたり、「比較する」という活動を取り入れたことは、既習事項を整理し、疑問の答えを主体的に考察するための手立てとして有効であった。

ワークシートの表記には「『なぜ、○○なのか』『○○と思う』」というような表現が見られた。

本研究では「なぜ」に対する答えを予想することは事象の意味を考察するきっかけと捉えるので、既習の知識を結びつけることで、考察する活動につながるという成果があった。

資料から気付くことを基に、疑問を考えることは個人活動として行えるが、ＭＱの設定に当たっては個人の疑問すべてを網羅したものを設定するのは難しい。多くの生徒の疑問を基にＭＱが設定されるよう、資料提示、気付きの部分で目標に迫るような視点や、既習事項とのつながりを示す資料掲示の工夫が必要である。

(2)　検証の視点２

ＭＱの解決につながるＳＱを設定し、課題解決的な学習過程を経ることは、単位時間ごとに歴史的事象のつながりを意識したまとめをすることに有効であったか。

①　結果

追究する過程は、ＭＱ設定後から、それに関わるＳＱ１～ＳＱ３までのおよそ３時間を使って行った。ＭＱの設定や、ＭＱの解決に１時間は使わずに実践したため、追究の過程はおよそ３時間となった。ＭＱを単元を通じて意識するため、ＭＱが設定されて以降の各単位時間のワークシートにはＭＱと並ぶようにＳＱを記入する欄を設けた。

ＳＱ１「なぜたくさんの黒船が日本にやってきたのか。どのようなことが起きるのか。」

『黒船来航』の絵を基にＳＱが設定された。『日米和親条約』と『日米修好通商条約』の条文を比較しながらまとめる学習を行い、日米間の不平等さを考察させた。図３のような記述が見られた。他生徒のように、日本にとって不平等な条約の内容を基にその後の変化を考察している生徒は（36人中9人→25％）条約の内容から不平等さを文書で表現できている生徒が（36人中15人→42％）であった。日米間の不平等を読み取れている生徒は67％であった。**（36人中24人→67％）**

A	○日本は不平等条約を結んでしまいました。なぜ、不平等と分かっているのにも関わらず、条約を結んでしまったのか、この後の展開が楽しみです。
B	○アメリカが日本に結ばせた条約が不平等なことしかなくて、当時の日本の力の無さが分かってきました。
他生徒	○日本は関税自主権を認められ無かった。そのため、安いものが輸入されてしまうと思う。アメリカなどは日本で商売がしやすくなるのではないかと思う。欧米の日本国内での力が上がってきている。 ○欧米に領事裁判権を認めたり、日本に関税自主権が無かったり日本にとってとても不平等な条約を結ぶことになった。

図３　ＳＱ１に対する生徒の記述【一部抜粋】

ＳＱ２「開港（開国）したことで、誰が、どのような影響をうけたか。」

資料への疑問として、多くの生徒が、ＭＱの「欧米（外国）人」の言葉が挙げられた。資料（横浜の開港前後）の比較段階で、ＭＱを意識して「外国」の言葉を入れて予想できている生徒がいた「開国による国内の影響」を（幕府・一般・尊皇攘夷）の立場に立って考察を行った。

様々な立場に立っても振り返りでは、「欧米（外国）人」からの影響を意識したものになっていた。「外国からの影響で日本が変化したこと」を考察させたところ図４のような記述が見られた。他生徒のように原因と結果に触れている生徒が（35人中12人→38％）結果についてのみ記述している生徒は（32人中→14人44％）であった。**（32人中26人→82％）**

A	○外国と関わったことで、貨幣の価値など、色々な問題が生まれました。今後どうやって物価を下げるのか気になります。
B	○開港(開国)したことで、幕府への不満が高まり、物価の上昇で、生活が苦しくなっていったことが分かった。
他生徒	○この時代の人々の考えや思いから幕府への怒りや不満がたまっていると思いました。外国からの輸入品が増えたことで、物価の上昇や、打ち壊し一揆などが起こり、武士は尊皇攘夷の考えをもち社会が安定しないと思いました。 ○開国したので、物価が上昇したり、尊皇攘夷と幕府が対立したり色々な問題が起きた。

図４　ＳＱ２に対する生徒の記述【一部抜粋】

ＳＱ３「なぜ、このような様子になっているのか。どのようなことが起きているのか。」

『大政奉還』の絵を示し、ＳＱは「なぜ、このような様子になっているのか、どのようなこが起きているのか」が設定された。予想として、【「欧米（外国）人」と対抗する準備、日本が大 きく変わる時、新しいことを始める時】と挙げている生徒がいた。ここでは、長州藩・薩摩藩・幕府の動きを調べ、それをまとめる活動を通して考察した。図５のような記述が見られた。他生徒のように長州藩・薩摩藩が攘夷から倒幕へと変化し、幕府が大政奉還したことなど、大政奉還の背景とともに考察できている生徒が（35人中15人→43％）幕府が大政奉還し、政権が幕府から朝廷に返されたことを捉えられた生徒が（35人中12人→34％）**（35人中27人→77％）**

A	○戊申戦争が起きたことにより、立場が大きく変わったと思います。新政府が今後どのような政策をとるのか楽しみです。
B	○徳川慶喜が大政奉還したことで、幕府と新政府軍の間で戊申戦争が起きた。
他生徒	○長州藩・薩摩藩が外国から攻撃を受けたことが分かった。薩長同盟や大政奉還から、これからは天皇中心の政治になると思う。 ○政権が朝廷に返された（大政奉還）、幕府が滅び、天皇中心の新政府となった。

図５　ＳＱ３に対する生徒の記述【一部抜粋】

②　考察

追究の過程ではＳＱ設定後、予想を立てる場面を設定した。多くの生徒がＭＱを意識して、本時の予想を立てることができていた。ＭＱを毎時間示すことは単位時間のつながりを意識して考察するために有効であった。

事実の認識をねらった疑問詞を構造的に組み合わせてＳＱを設定したことで、単位時間のまとめが事実をもとに考察し、記述している生徒が多かった。

(3)　検証の視点３

ＳＱの解相互のつながりや、ＭＱとのつながりをまとめることは、単元全体の歴史的事象のつながりを考察する力を育成することに有効であったか。

①　結果

ＳＱを解決するという単位時間の学習内容を基に、ＭＱに対して単元全体のまとめを行った。図６のような記述が見られた。他生徒のように歴史的事象とその背景を考察している生徒が（35人中21人→60％）結果のみの記述した生徒は（35人中4人→11％）であった。**（35人中25人→71％）**

A	○ペリーが黒船で現れたことにより不平等条約を結ばされてしまった。日本に力がなくて、色々な国とつながりが増えた。幕府が外国からの圧力に負けて損が多かったから。
B	○砲台を打った日本が弱い。貿易などにより、今までに無い、色々な情報が入ってきた。
他生徒	○日本の砲台が占領されたのは、日本（長州藩）が外国船を砲撃したからだと思った。この出来事があったため薩長同盟が結ばれ大政奉還へとつながり日本を大きく変えたと思う。 ○幕府が外国からの圧力に負けてしまったから。

図６　単元全体のまとめについての生徒の記述【一部抜粋】

③　考察

生徒の記述より、事実を根拠に歴史的事象を考察している姿が多く見られた。歴史的事象のつながりを意識して学習に取り組んだ様子が見られた。ＭＱとＳＱの解決の学習過程を経たことで、歴史的事象のつながりを捉えようとする姿が見られた。

３　本研究を振り返って

(1)　結果（生徒の振り返り）

A	○小学校の頃は、誰が何をしたで終わっていましたが、中学校に入って誰が何をするために、何をしたなどかなり詳しくなりました。昔は今と違って、強いか弱いかで、大きく変わると思いました。
B	○反乱や深いつながりがよく分かり、なぜそうなったのかなどのことも考えることができました。
他生徒	○小学校で学習したことをより深く知ることが出来ました。例えば、開国するのは知っていたけれど開国までの出来事や、不平等な条約の詳しい内容などを学びました。 ○新しく知ったことは江戸幕府滅亡までの流れで、尊皇攘夷運動や、それに関わった人々などでした。もっと詳しく知りたいこともあるので、自分で調べたいと思います。

図７　この単元の学習を通して知ったことや考えたことについての生徒の記述【一部抜粋】

(2)　考察

図７に示した様につながりや流れを意識した記述が**（35人中28人→80%）**であった。ＭＱを意識してＳＱを設定したり、ＭＱ、ＳＱを意識して学習に取り組んだ結果、歴史的事象のつながりを考察する力の育成に有効であったと言える。今まで、一問一答的に捉えていたということから流れやつながりを意識して行えたと振り返る生徒が多かった。更に、今後学習する先の時代について予想する生徒も増えていた。まとめや、振り返りの記述から、社会的事象の目的や、背景について学習することのよさに気付いた様子がうかがえる。

Ⅶ　研究のまとめ

１　成果

単元全体に関わる資料を精選したり、資料を読み取る視点を示したりすることを通して、単元の目標（ねらい）の達成を導くための問いＭＱを生徒が主体的に設定し、さらにその下で、単位時間ごとにＭＱの解決につながるＳＱを設定し、問題解決的な学習過程を経ることは歴史の流れを捉え歴史的事象のつながりや、因果関係を考察する力を育成するために有効であった。

(1)　「つかむ過程」において

資料を比較・検討したり社会的事象を既習事項などと結び付けたりすることでより、多くの生徒が疑問を見いだして、その疑問を生かして、学級全体として納得のいくＭＱを設定できた。教師が単元の目標(ねらい)に沿って設定させたいＭＱを教師が予め想定することで、資料の精選や、資料を活用するために示す視点を明確にできた。その際、単元の構造化シートを作成し、単元の目標(ねらい)を整理したことは有効であった。

(2)　「追究する過程」において

ＭＱとＳＱにつながりをもたせるために、ＳＱはＭＱの言葉と関わらせて設定した。また、目標(ねらい)の達成に導くために「５Ｗ１Ｈ」の疑問詞を適宜組み合わせてＳＱを設定し、事実の認識をもとに考察する問題解決的な学習を行った。ＭＱとＳＱに関わりをもたせたこと、ＳＱに使われる疑問詞によって問われる内容がより具体化され､単元の学習内容に見通しがもてたことなどから、ＭＱの解決の意識を継続するために有効であった。

(3)　「まとめる過程」において

ＭＱと関わるようにＳＱを設定したことや、ＭＱの解決の意識が継続できるように、ＭＱをワークシートや黒板に毎回示したことで、ＳＱの解相互のつながりを生かしたＭＱのまとめができていた。単元を通じて、今回の様な問題解決的な学習過程を経たことは、歴史的事象のつながりを考察する力を育むことに有効であった。

２　課題

(1)　「つかむ過程」において

ＭＱを設定する時に、資料の提示方法や視点の示し方を工夫するとともに、既習事項の振り返りも生かすことで、単元同士のつながりがより意識できると考える。

(2)　「追究の過程」において

ＳＱの設定について､使用する疑問詞によって求める内容の階層に差があることを教師が意識し、設定することで、目標（めあて）の達成への迫り方がより明確になると考える。

(3)　「まとめる過程」において

単元の歴史的事象のつながりを考察した後に、小学校の既習の歴史学習を振り返り、次の単元に向けての予想の場面を取り入れることで、既習の単元と次の単元のつながりを意識するきっかけになると考える。

Ⅷ　提言

中学校歴史的分野第２学年での実践であったが、歴史的分野においてはどの単元でも本研究の問いの構造化による単元構想をいかして実践できるものであると考える。単位時間がつながることで単元においての歴史の流れが考察できる。歴史的事象のつながりを考察する学習を重ねることで、単元と単元のつながりを考察できるようになり、歴史の大きな流れを捉えられる力も育まれていくと考える。

＜参考文献＞

・文部科学省　『中学校学習指導要領』　(2017)
・文部科学省　『中学校学習指導要領解説　社会編』　(2018)
・群馬県教育委員会　『平成30年度学校教育の指針（解説）』　(2018)
・小原 友行　著　『思考力･判断力･表現力をつける社会科授業デザイン』　明治図書　(2009)
・澤井 陽介　著　『社会科の授業デザイン』　東洋館出版　(2015)
『授業の見方「主体的･対話的で深い学び」の授業改善』　東洋館出版　(2017)
・青柳 慎一　著　『授業を変える　課題提示と発問の工夫45』　明治図書　(2015)

＜担当指導主事＞

小林　旭　　天田　直木